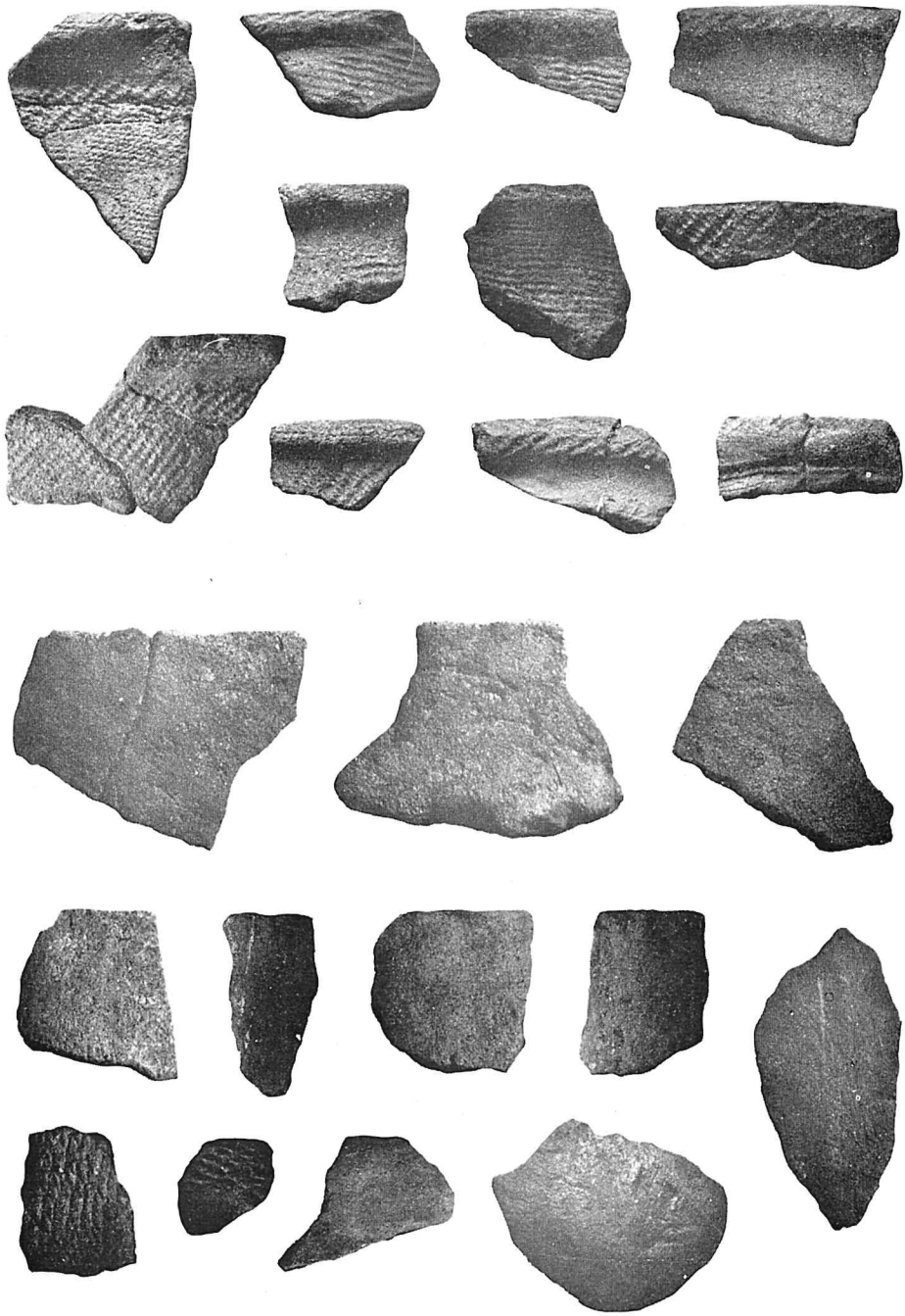


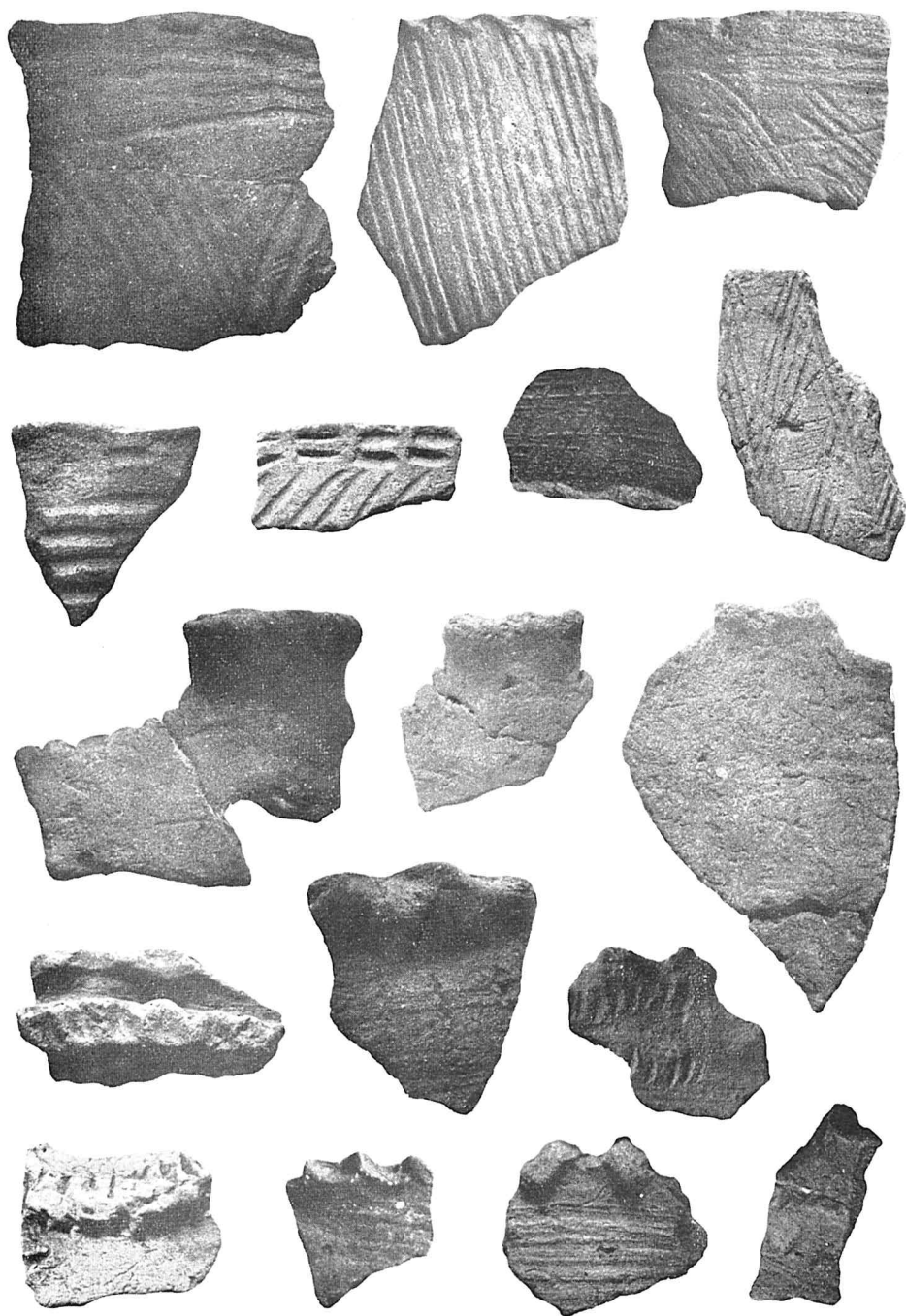
(図版一)

馬の背山遺跡の土器

(一)

(第一群土器・第二群土器・第三群土器)

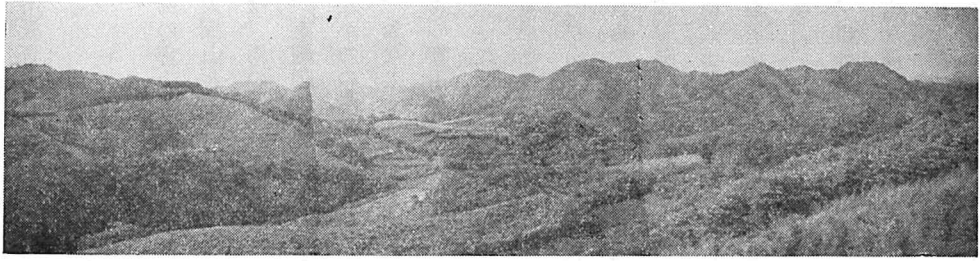




(圖版二)

馬の背山遺跡の土器 (一)

(第三群土器・第四群土器)



第1図 馬の背山遺跡遠望（中央の畑の部分）

## 三浦郡葉山町馬の背山遺跡

岡 本 勇

一、ま え が き

三浦半島に存在する縄文時代の遺跡は、そのほとんどが海岸部に集中している。野島・夏島・平坂・田戸・平根山・茅山・大浦山・三戸・鶴ヶ島台など、すでにその名の知られている主要な遺跡をはじめ、およそ四〇カ所を超える遺跡の分布が、このことをあきらかに示している。しかし、これらの遺跡の背後につながる高い丘陵地帯には、なんらの遺跡も存在しないのだろうか。このことは、かつてのわれわれにとって、けっして小さくはない疑問の一つであった。

一九四九年四月十六日、われわれは三浦半島の主峯大楯山（二四二メートル）の北方につづく丘陵地に縄文時代の遺跡を発見した。そこは俗に馬の背山とよばれ、太平洋戦争の末期に付近に駐屯していた日本海軍の兵士によって、畑地として開墾されたところであった。

馬の背山遺跡からは、はじめ三戸式・茅山式、および諸磯b式などの型式に属する縄文式土器と石鏃等の遺物が採集されていたが、その量はけっして多くはなかった。その後、われわれやその仲間たちの手によって、さらに多くの遺物があつめられ、以上の土器型式のほかに、縄文式土器のうちで最も古いとされる井草式（似た）土器なども発見された。しかもこれは、口辺部付近に特殊な捺糸文の施文をもつことにおいて、少からずわれわれの注意をひきおこした。また、茅山式とした土器のうちには、あらたに連続爪形文・皿状把手・乳房状尖底などを示すものが認められたが、これらは茅山式土器プロパーにそなわる要素ではなく、むしろより西方の他地域の土器との関連を考えさせるものであった。このように、馬の背山遺跡で採集された土器が、——その少い量にもかかわらず——われわれに提起した問題は、避けえないもののように思われた。

これらの問題にとりくんでいくためには、まずなによりも発掘に期待しなければならなかった。第一回の発

掘は、一九五七年十月十九・二十日の両日におこない、第二回の調査は同年十一月一日、二日、三日の三日間をそれにあてた。この調査は、横須賀市教育委員会の主催によるものであり、赤星直忠先生を発掘担当者とし、われわれ横須賀考古学会メンバーが協力しておこなわれた。

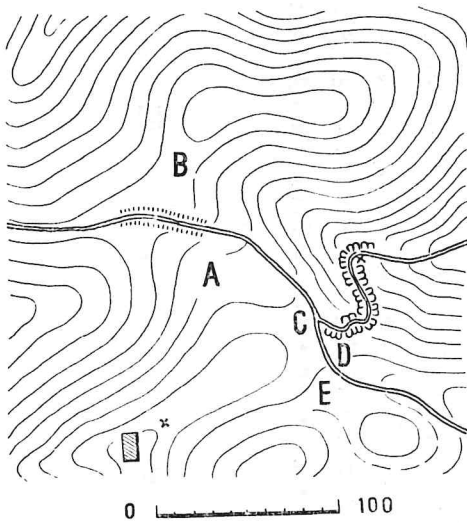
二、遺 跡

馬の背山遺跡は、神奈川県三浦郡葉山町木古庭、俗称馬の背山にある。

大楠山と、その西北方につらなる仏塚山（二二七メートル）との間には、不規則な起伏をなすいくつかの丘陵の尾根がつづいているが、この遺跡は、馬の背の地名があたかもその場所の地形をあらわすように、それらの尾根の一つの、いわば鞍部にのこされている（第2図）。大楠山からは、直線距離にして約一二〇〇メートルの地点であり、付近での標高は約一六〇メートルを数える。この数字は、三浦半島における縄文時代遺跡のなかでの最高位を示すものである。これにつぐものとしては、横須賀市長坂の大平遺跡（茅山式土器出土）をあげることができる。大平遺跡も、おなじく大楠山の東南方につながる丘陵性の遺跡であるが、標高は約一一〇メートルを数えるにすぎない。

馬の背山遺跡は、現在畑地となっているが、これがごく近い時期に開墾されたものであることは、まえに述べた。遺物は、およそ五つの地点にわたって散布している（第2図）。馬の背のいわば鞍部を丘陵の尾根道が東西に走っているが、この道の南側に東向きに緩斜面がある。これがA地点であり、諸磯b式土器のみが純粹に発見される。さらに、その下方の一段と低くなつた部分は、尾根道と木古庭部落方面から上ってきた道との交叉するところであるが、これらの道をさかいにしてC・D・Eの各地点がある。C地点からは、三戸式、田戸下層式、鶺ヶ島台式、諸磯b式などの土器が発見されており、またD・Eの両地点には、茅山式土器の散布が知られているが、ともにその量は少い。B地点、すなわちA地点の尾根道をこえた北側は、もっとも高い位置にあり、遺物の散布する範囲も広く、その量も多い。しかもここからは、早期のいくつかの型式の土器が発見されている。ところで、C地点付近は、いわば一種の分水嶺をなしているが、これに接した左右の谷頭には豊富な湧水がみられる（第2図に×印をもってあらわしたところ）。この湧水は、馬の背山遺跡を理解する上でみのがすことのできないものであると思う。

発掘は、主としてB地点にたいしておこなわれた。まず、包含層をさがし求めるため



第2図 馬の背山遺跡地形図

に一定の間隔をおいて、ボーリングを試みた。その結果、多くの個所では耕作土から、ただちにローム層へと移行しており、遺物は求めうべくもなかった。しかし、丘陵の二つの高い部分にはさまれて低くなっている地域には、黒色土が厚く堆積しており、しかもその黒色土の下部と、それにつづく褐色土のなかには、比較的多くの遺物が包含されていた。第Ⅰトレンチは、中1メートル・長さ10メートルの規模をもって、この地域に南北の方向に設定したが、遺物のより多かったのはその北隅であった。したがって、それと直角に西へ第Ⅱトレンチ(1×5メートル)を掘り、遺物の包含範囲を追求した。この結果、遺物の豊富なのは、ふたつのトレンチの接する付近一帯であることがわかったので、その周囲に発掘区を拡張した。以上が第一回の発掘である。第二回の発掘は、それに隣接する部分に陸稲の刈入れをまっておこなわれた。この部分には、それぞれ接続して五つの発掘区(2×10メートル)をさだめ、順次発掘を進めたが、第一回の発掘地に接したところに遺物が多かった。また、これらの発掘地からやや東にはなれた個所に、二つの発掘区を設けたが、黒土層はみられず遺物は乏しかった。なおD区に、中1メートル・長さ6メートルのトレンチを掘ったが、数片の茅山式土器が黒褐色土層のなかから発見されたにとどまり、時間の都合上それ以上に作業を進めることを許されなかった。

発掘の中心地付近では、ローム面までの深さは約一三〇センチを数える。これを第Ⅰトレンチの断面で観察すると、約六〇センチの厚さの黒色土の下に、褐色土(約七〇センチ)があり、つづいてローム層となる。また、第Ⅰ区(第二回発掘)の断面で見ると、表土(耕作土)の下に、厚さ約二〇センチの黄褐色土のバンドがあり、さらに黒色土(四〇センチ)、褐色土(二〇センチ)、黒褐色土(三〇センチ)の堆積順序をへてローム層となる。なお、第Ⅱトレンチなどでは、耕作土の下に木炭片・焼土等を含む薄い層が認められたが、これは黄褐色土のバンドなどとともに、その成因が耕作に關係ある二次的な堆積物である。二、三の個所では、層序にいちじるしい不整合がみられたが、これは地盤変動のさいに生じた断層であると考えられる。

堆積土が示す層序と、その各層から出土した土器型式とのあいだには、秩序だった関係はみられない。遺物は、厳密に言えばローム面より上のすべての層から見出されるが、実際には黒色土、褐色土が包含層の主体である。しかし、それらの層においても遺物の包含はいちじるしく少く、土器型式相互の上下関係も明確ではない。褐色土層のなかからは、後述する第一群(井草式類似)土器、第二群(無文)土器、第三群(三戸式)土器などがほとんど無差別に発見されたが、ただ第四群(広義の茅山式)土器の出土は、この層の上部にのみ限られていた。黒色土層には、第四群土器が比較的多く、また僅かに発見された第五群(諸磯b式)土器は、この層の上部の出土であった。

石器の発見は、きわめて乏しかった。発掘によるものとしては、黒色土から出土した二個の石鏃(第3図23・24)と、褐色土層下部から発見された鉞様の石器(27)をあげることができるだけである。また、黒耀石の細片等も比較的少かったし、他の早期の遺跡でおびただしく見出される

磔塊も、ここではきわめて稀であった。

### 三、遺物

まえにも述べたように、発掘された遺物は数は少く、その総量はかろうじて一個のリング箱をみたす程度である。したがって、遺物の報告を記述するにあたっては、表面採集によってえられたいくたの資料をも参考に役立てたいと思う。

遺物は石器と土器にかぎられる。そのほかに、若干の石片・磔塊などがあるが、それらはとくにとりあげて説明すべき内容をもたない。

### 石 器 (第3図)

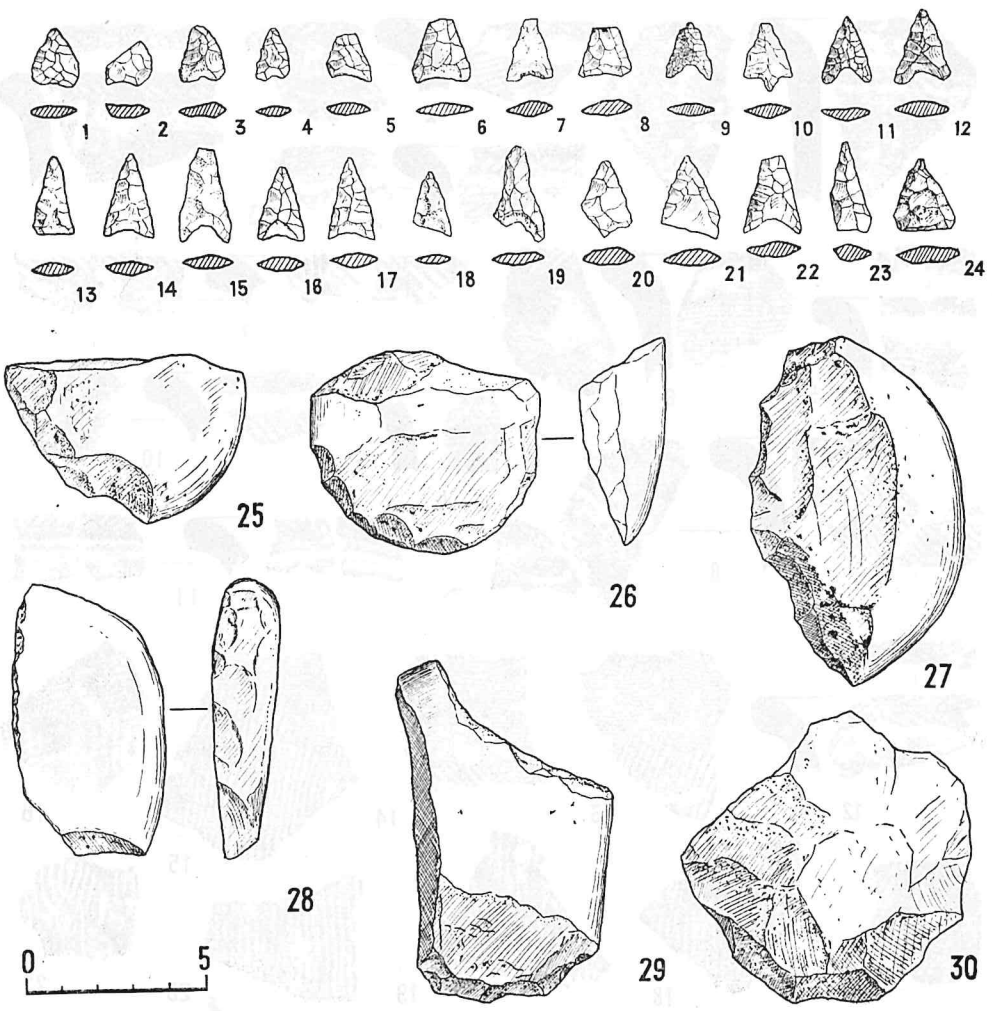
#### A 石 鏃 (1—24)

石鏃については、とくにこの遺跡の各地点から採集されたもののすべてを記述したい。製作の技術をも含めて、その形態にはいくつかのバラエティがある。

(一)、比較的小形の不整な三角形をなすもの(1—5)。これらの底辺には、ごく僅かの彎入がみられる。頁岩製のもの(4)一個のほかは、すべて黒耀石を材料とする。製作はきわめて粗雑である。いずれもC地点から発見された。(二)、正三角に近いもの(6・8・21・24)、形はやや大きく、黒耀石製のもの三個、硅岩製のもの(6)一個がある。A・B地点の採集、(24)は第Iトレンチ黒土層からの出土。(三)、二等辺三角形を示すもの(13—18、22・23)、とくに三角形のいわば高さの長いものをさす。これには底辺の平らなものと、彎入のあるものがある。硅岩・頁岩を材料とし、黒耀石製のもの(22)は一例しかない。(23)は、第I区黒土層から出土した。(四)、有茎のもの(10)、硅岩製であり、A地点からの採集品。茎は短く、しかも粗雑につくりだされており、縄文時代後期などに一般的にみられるものとは差がある。(五)、Yの字を逆にしたような形のもの(19)、表現が適切でないが、かりにそうよんでおく。硅岩製、B地点から発見された。先端部はにぶく、挟りこみは精巧でない。

(六)、先端につくりだしのあるもの(9)、B地点発見、黒耀石製で比較的きれいにつくられている。いわゆる底辺には挟りこみがあり、先端に小さなつくりだしをもつのが特徴である。その他、(11)は北側湧水点に降りる坂道で単独に採集されたもので、黒耀石を材料とする。(12)はおなじく黒耀石製で、南側湧水点の西方の山頂から、無文土器などとともに発見されたもの。また、挟りこみのふかいしたがって、両脚をそなえたような形の石鏃の脚部だけが、ともに採集されている。

#### B 礫利用の石器 (25—30)



第3図 馬の背山遺跡の石器

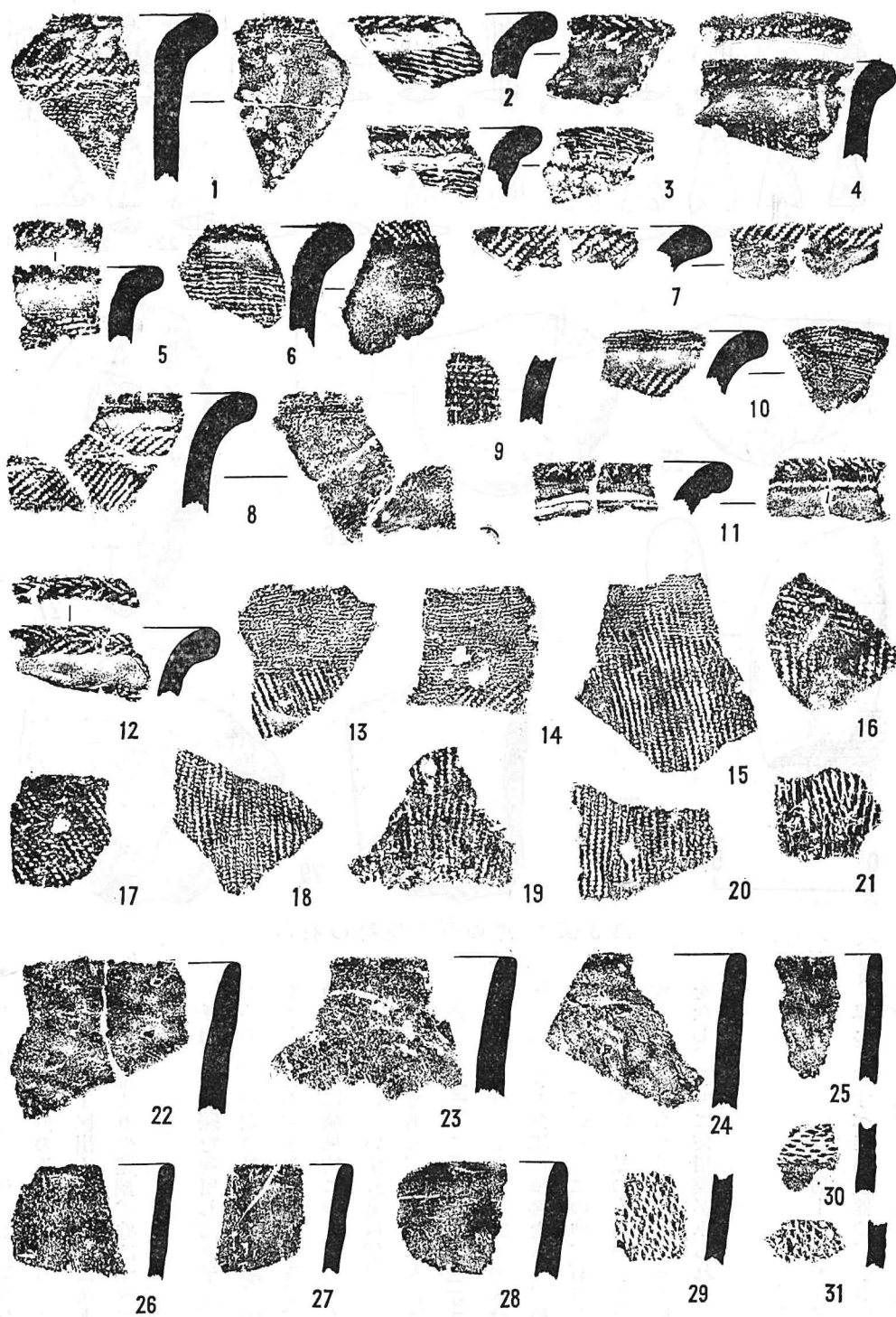
これについては、他地点に発見例が少ないのでB地点のもののみを報告する。このうち、(29)は第Ⅰ区出土、(30)は第Ⅱトレンチ褐色土下部よりの発掘、他はすべて表面採集による。

手頃な自然礫を利用した簡単な石器がいくつかある。一定の形の礫の先端、側面、周囲をあまり打ち欠き及としているが、使用中の衝撃のために結果的にそうなったものもあるかも知れない。いずれも自然面をひろく残すことが特徴である。機能的にみれば、これらは鈍(Chopper)であり、槌(Hammer)であったと思う。しかし(28)のみは、側面に平らなままの加工の痕跡をもち、他とおもむきを異にしている。この他、石皿と磨石がある。石皿は安山岩製のものの小さな断片で、両面に凹みをもつ。磨石は、その形が石鹼状をなし、周囲に使用痕がみられる。半分を欠く。

土器(第4・5・6図)

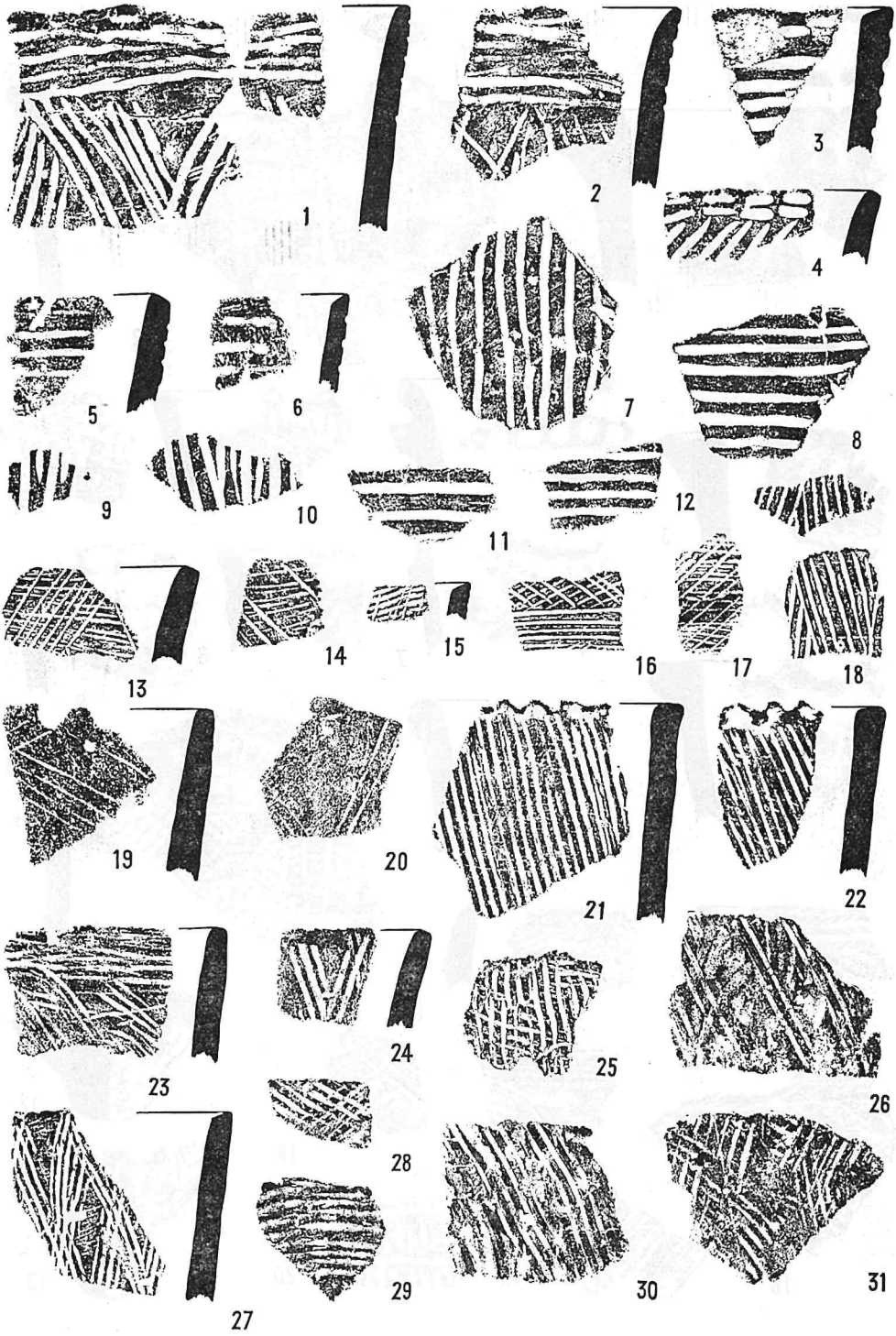
ほとんどすべての土器は、小さな破片として発見された。全体の器形を復元しよう



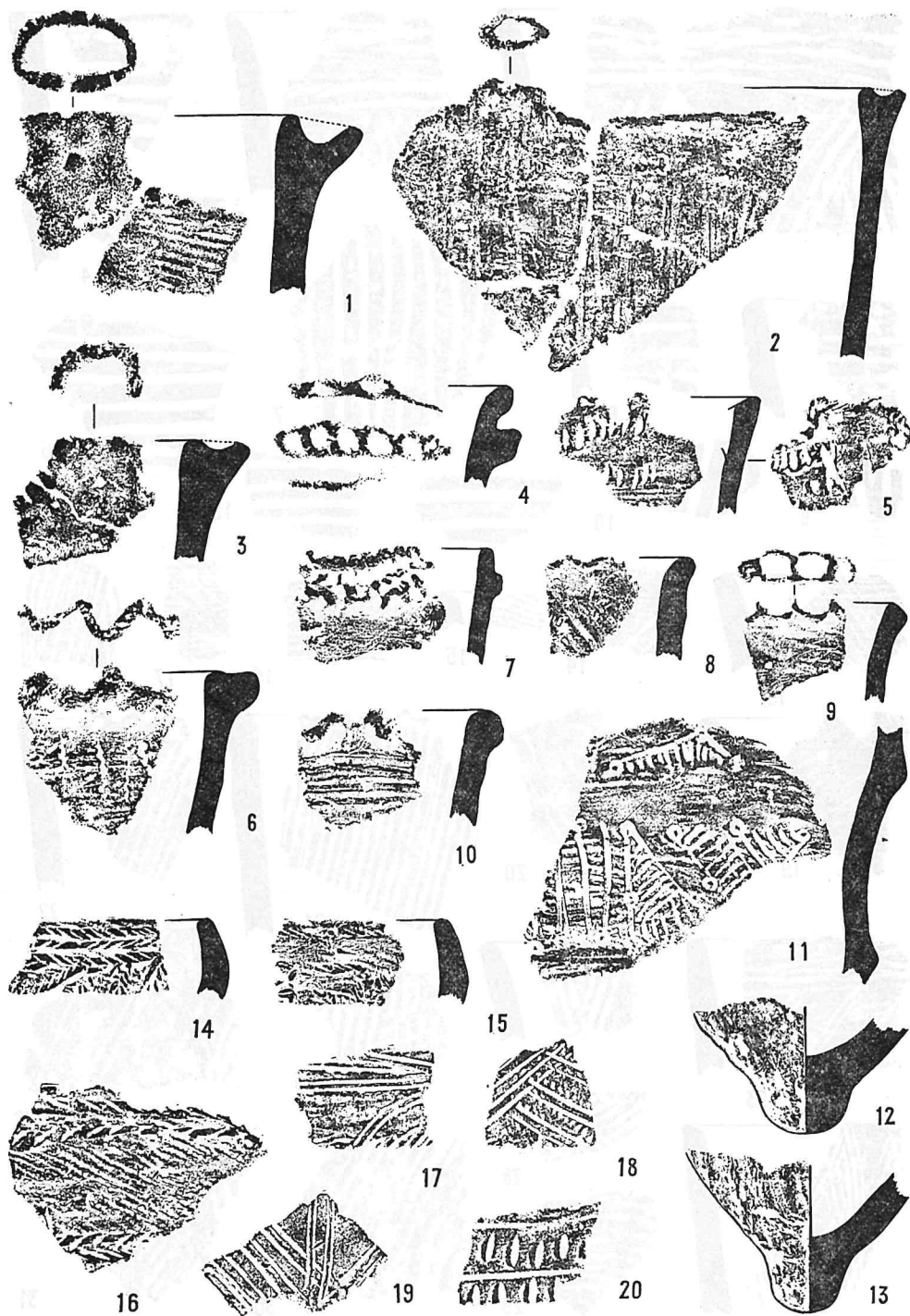


第 4 図 馬の背山遺跡の土器 (第一群 1~21、第二群 22~28)  
 (第三群 (捺型文土器) 29~31)





第 5 図 馬の背山遺跡の土器 (第三群 1~31)



第 6 図 馬の背山遺跡の土器 (第四群 1~13、第五群 14~20)

なものは認められない。しかし、それらが示す形式的な内容は、かなり複雑であり、くわしい観察が必要とされるのである。いま、ここでは、部分的な器形と文様上の差をもとにして、五つの種類に大きく区別し、それぞれの説明をこころみようと思う。

#### 第一群（第4図1—21）

縄自体、およびそれを軸棒にまいて回転した文様、すなわちある一定の縄文・捺糸文をもつものを一つのグループとする。これらは、おおむね茶褐色ないし黄褐色を呈し、口辺部付近においてその厚さ九ミリ前後を普通とする。すべての口辺部は、やや外傾し、また、ふくらみをもった口縁は、あたかも下唇状にいちじるしく外反しているのを特徴とする。文様の上で、まず注意されるのは、口唇および口縁内面に施文のみられることであり、とくに内面のそれは、かなり下方にまで及んでいる（8・10）。これらは、いずれもその条が横に走る捺糸文である。口唇には、捺糸文の施されたもの（1・8・10）と、縄文の施されたもの（2—7、12）とがある。そして、とくに前者のなかには、それにつづいた口縁直下に縄文が走り、さらに捺糸文が施され、以下縦の縄文となるものがある（1、13—15）。また、あるものには、口縁直下に無節 $\wedge R \vee$ の縄文が、ほぼ横に走っている（2・3）。胴以下は二、三の例（13・15）が示すように、縦方向の縄文によってみだされるものと思われるが、ほかに捺糸文をもつ細片もみられるので確実なことはいえない。これらの文様の原体を調べると、縄文の場合には $\wedge L R \vee$ が多く、また $\wedge R \vee$ もみられる。捺糸文の場合には、ほとんどが $\wedge R \vee$ であると観察される。なお、特殊な例として、口縁直下に半截竹管のようなものでかかれた沈線をもつ破片がみられる（11）が、これが意識的につけられたかどうかは、あきらかでない。

以上の土器の示す口縁部の器形と、一部の文様のあり方は、いわゆる井草式土器にくらべるのできるものであり、なかには井草式としてさしつかえないものもある。しかし、特殊な捺糸文の施文をもつ土器は、これをただちに井草式そのものとすることができない。また、南関東地方の二、三の遺跡で井草式土器と伴出した捺糸文の土器、すなわち大丸式土器と比較しても、その口縁部の形や捺糸文のあり方は、まったく違ってよいほど異っている。現在、われわれはこのような土器を他に知っていない。井草式土器のなかの一つの変形とみるべきか、あるいは新しい型式として認むべきかの問題は、のちにゆずらねばならない（註1）。

#### 第二群（第4図22—28）

わずかではあるが、文様のまったく無い土器がある。これらの意義を充分に認め、一つのグループとしてとりあげる。このうちには、黒褐色を示し比較的薄手のもの（25—28）と、黄褐色を呈したより厚手のもの（22・23・24）とがある。しかし、口縁はその充端が丸味をもち、器面にうすい擦痕をもつことにおいては、ともに共通している。また、このグループにふくめらるべき土器の底部が三例ほどあるが、その形は丸底ないし鈍角な尖底をあらわしている。

これらの無文の土器が、いわゆる「無文土器群」(註2)と関係あるものであろうことは、容易に考えられることである。しかし——とくに前者の場合は——、われわれが知っている無文土器群の型式、すなわち平坂式土器や「大浦山式に伴なう無文の土器」などは、感覚的に異なっている。もし、しいて類似例を他に求めれば、三浦市初声町三戸遺跡の資料のなかに、三戸式土器に混ってみられるごく僅かの無文土器をあげるべきであらう。

### 第三群(第5図1—31、第4図29・30・31)

平行沈線文・貝殻条痕文、および回転捺型文のある土器をかりに一つのグループとしたが、これらはさらに区別してとりあつかわねばならない。

A類、平行沈線を文様要素とするもの(1—20)。この種類の土器は、灰褐色および茶褐色を呈し、一センチ前後の厚さを普通としている。繊維はふくまない。口縁はその先端が平らで、しかも内側へそいだような形をしたものが多い。平行沈線には、比較的太いもの(1—12)と、細いもの(13—20)とがある。前者であらわされた文様は、平行線文・鋸歯文などを構成している。また、後者でかかれたものには、鋸歯文などの他に格子目文を表現したものが多い。

B類、条痕文の施されたもの(21—31)。土器の色や厚さはA類にひとしい。口縁の形も、おなじく内側へそいだようなものが多いが、なかには口唇に刻目をつけた特殊な例もある(21・22)。条痕はおそらく貝殻によって施されたものと思われるが、あるものはただ雑然と無秩序にあらわされ(23・25・26・30・31)、あるものは整然としかも文様効果を意識して利用されている(21・22・24・27)。

C類、楕円形捺型文のあるもの(第4図29・30・31)。わずかに三つの小さな破片を数えるにすぎないが、胎土に雲母片をふくんでいることや、五—六ミリ程度の薄手であることは、文様のちがいととも前に二者とは、はっきりと区別される。文様の単位である楕円は、長径四—五ミリの比較的小粒のものであり、それがあつたものでは、ぎっしりつまっているようにみえるのは、一つには原体に刻まれた彫りがあさいためである。口辺部に近い破片(30)では横位に、胴部の破片(29・31)では縦位に、それぞれ文様は回転方向を異にして施されているらしい。

以上のうちA類としたものは、いわゆる三戸式土器にふくめられることがほぼ疑いない。またB類も、そのほとんどが三戸式としてさしつかえないものであろう。このことは、三浦市三戸遺跡の三戸式土器一般と比較していっそうあきらかである。ただ、三戸遺跡の土器の場合には、口縁の先端が内側へそいだような形をほとんどするのに対し、この遺跡の土器の場合は、田戸下層式土器のそれに似て、口縁の外側へそいだようなもののあるのが一つの差として指摘される。楕円形捺型文の土器は、厳密な意味でいえば、三戸式土器とは本来分離されるべきものである。しかし、それが三戸式土器にともなうことは、いくつかの事実によってあきらかである。なお、三戸遺跡からは、楕円形文の他に山形・格子目形の捺型文

土器が出土しているが、ここではそれを見出せなかった(註3)。

#### 第四群(第6図1—13、ただし11を除く)

土器の表裏面に貝殻条痕をもち、また例外なしに繊維をふくむものを一括して、第四群土器とする。これらは、いわゆる茅山式土器一般にもっとも似た性質をそなえているが、しかし、それに比較すると、繊維をふくむ率が少く、またより薄手であることに注意がむけられる。口辺部付近での厚さは一センチをこえるものはきわめて稀であり、土器の色はおおむね灰色あるいは黒褐色を示すものが多い。口縁には把手をもつものがあり、その形はいわゆる皿状をなしている(1・2・3)。またこの他に口縁には、いくつかの裝飾がみられる。いくらか波状に突起した部分に粘土紐を「ハ」の字状に貼りつけたもの(10)、口縁のまわりを外側にふくらませたもの(6)、あるいは押捺を施したもの(9)などがそれである。また、口縁の直下には、それと平行に突帯を有するものがあり、その突帯上には刻目あるいは押捺がくわえられている(4・7)。比較的大きな破片からこれらの土器の形を推定すると、口縁より底部にかけては、なんらの屈曲も示さないゆるいカーブが考えられるだけである。底部に属する破片は二例出土しているが、これらの形は特異である(12・13)。尖底の先端に、さらにごく小さな丸底がつづいたといった感じのものであり、本来の茅山式土器にはたえてみられない形である。貝殻条痕は、かならずしもすべての土器片にみられるわけではない。あるものはまったく条痕をもち、たんなる擦痕をとどめているだけである。条痕以外の文様としては、連続爪形文・貝殻腹縁文などがあげられる(5・6)が、これらの施文は口辺付近のみかざられている。

かつてのわれわれの経験と知識にしたがえば、以上の土器は、たんに茅山式として、あるいはそれに併行する型式として、とりあつかわれたにすぎなかったろう。しかし、茅山式土器のさらに細分された結果からみれば、そのうちのいくつかは茅山上層式にふくめられるものであり、他はそれと関連ある別型式のものであることがあきらかである。具体的にいえば、いわゆる皿状の把手、特異な尖底、連続爪形文などは、伊豆以西から東海地方にかけて分布する早期末の一群の土器型式の特徴にうじている(註4)。

#### 第五群(第6図14—20)

竹管文を主要な文様要素とするいくつかの土器がある。発掘ではわずかな破片しか得られなかったが、A地点からはそれだけが純粹に発見されている。これらは、前期の後半に編年上の位置を占める諸磯b式に属することが疑いない。文様としては、竹管文の施されたもの(17・18・19)と、浮線文によって飾られたもの(14・15・16)などがある。後者の口辺は、内側に彎曲する独特の形を示している。

なお、以上の土器の他に、表面採集によってえられた土師器の細片があるが、その型式はあきらかでない。またC地点からは、田戸下層式に属すると思われる尖底の破片、および二、三片の鶴ヶ島台式土器(第6図11)の発見されていることを付記しておく。

(註)

1 第一群土器を井草式とすべきか、あるいはそれとは別に考えるべきかの問題は、この遺跡の乏しい資料からでは解決が困難である。しかし、横須賀市西浦賀平根山遺跡(横須賀市博物館研究報告 第二号)からは、I式およびII式のふたつの傾向をもつ井草式土器が発見されており、そのうちのI式と馬の背山第一群土器の一部のものは対比することができる。したがって、この場合特殊な捺糸文の施文をもつものは、当然それらから分離さるべきであり、井草式一般とは異なるものとしなければならぬ。そして、口縁の肥厚外反のいちじるしい点などは、それらに比較してより古い要素を示すものと考えられる。もし、かりにこれを広い意味の井草式土器とてあつかえば、三浦半島に分布する井草式土器のなかには、三つの型的な傾向があるといえよう。

2 岡本勇「無文土器群の輪郭」貝塚七六号。

3 馬の背山遺跡第三群土器の発見によって、数少い三戸式土器の分布(現在約七カ所)にあらたな例を加えたわけである。現在、三戸式土器の分布は三浦半島にのみ限られており、それに隣接する地域からはまだ発見されていない。なお、最近、福島県下から非常に類似した資料が報告された(竹島国基「福島県双葉郡大平遺跡略報」石器時代第五号)。

4 われわれは現在、茅山式土器を野島式—鵜ヶ島台式—茅山下層式—茅山上層式の順序に細分している。一方、とおく滋賀県大津市石山貝塚では、早期末の各土器型式が層位的に出土しており、高山寺式(捺型文)—茅山式—粕畑式—上ノ山式—入海式—石山式の編年が可能とされている(平安学園考古学クラブ編「石山貝塚」一九五六年)。しかも、このうちの茅山式土器は、われわれの分類に従えば茅山下層式である。(なお、貝塚下からは高山寺式土器に混って鵜ヶ島台式とみられる土器片が出土している)。また一方、おなじく滋賀県安土旧琵琶湖底の遺跡からは、木島式土器—いわゆるオセンベイ土器—に伴って、花積下層式のモチーブをもったものが発見されている(山内清勇「近江安土村琵琶湖底遺跡の発掘」人類学会例會講演、一九四九年七月一日)。しかも、ここでは石山式なども発見されているが、それは木島式よりも時期的に古く考えられる。これらの事実にもとづいて、二つの地域の茅山式土器の編年をくらべるとつぎのようになる。

南関東 (三浦半島)	鵜ヶ島台式—茅山下層式—茅山上層式……………	花積下層式
畿内 (石山貝塚)	茅山式——粕畑式—上ノ山式—入海式—石山式	木島式

ところで、われわれがひろく茅山上層式土器とよんでいるものには、いわゆる皿状把手や、特異な尖底や、爪形文のあるものが伴い、粕畑式土器との関連を物語っている。第四群土器のうちのいくつかの要素も、上ノ山式などのものとみるより、粕畑式土器のそれとすべきであり、両者の併行関係が考えられる。このようにみるならば、三浦半島はもとより、ひろく茅山式土器の分布する南関東では、茅山上層式土器と前期初頭の花積下層式土器との間には、畿内地方や東海地方(この地域でも、石山貝塚でみられたとは同様な事実が確認されている。大参義「愛知県入海貝塚の土器について



て『古代学研究第九号、中山英司「入海貝塚」一九五五年』の場合に比較して大きな空白のあることに気付くのである。この空白は、漠然とした内容しかわかっていない茅山上層式土器を、さらに厳密に検討することと、新しい型式の発見とによってみたされていくにちがいない。そして、この課題は、尖底土器の消滅や、土器型式の流動の問題を考えるためにも、ぜひとも解決せねばならないのである。

#### 四、むすび

馬の背山遺跡からは、いくつかの型式の土器が発見された。これは、それらの土器を使用した人たちがこの場所で生活をいとなんだがために他ならない。けれども、遺物の量の乏しさが示すように、その生活の期間はけっして長かったとは考えられない。遺跡のある場所だけをとくにきりはなしてみれば——この丘陵地が、とくべつ住みよかったとは思われないのである。それにもかかわらず、この場所にいくたびか人々の住みついたのは、おそらく東西に走る丘陵の尾根がいわば当時の交通路であったからであらうし、またなによりも付近に豊富な湧水をひかえていたがためであらう。

石器の発見された数は、きわめて乏しかった。ただ、石鏃のみは比較的多かったが、これはすべての地点から採集されたものをあつめたからであり、しかもその大部分は諸磯b式土器の時期に属し、一部が鶴ヶ島台式土器などに伴ったものと考えられる。「撚糸文土器群」に属する第一群土器の出土にもかかわらず、いわゆる礫器 (Pebble tool) のまったくみられなかったことは、いくたの事実よりみてけっして偶然ではないと思われる。

土器は少い量にもかかわらず、いくつかの問題をふくんでいた。第一群土器は、結論的にいえば井草式一般から区別さるべきものであり、しかもより古い傾向をもつものとして、さらに追求さるべき性質のものである。第二群土器は、無文土器群と三戸式土器等とのつながりを考える上で問題を秘めている。また、茅山上層式土器と、それに併行するとみられるものは、とおく伊豆以西の西方地域の土器型式と比較していっそう關心のふかいものであり、今後に大きな問題をのこしている。

おわりにのぞみ、終始ご指導をたまわった赤星直忠先生をはじめ、発掘にご協力くださった神沢第一・古要祐慶両君、ならびに横須賀市立工業高等学校郷土研究部のみなさまにたいし、ふかく感謝するものである。